

## 先進事例検索システム

|       |        |
|-------|--------|
| 事例No. | 3318   |
| 公表年度  | R6     |
| 団体の属性 | 市区     |
| 団体名   | 青森県八戸市 |

|             |       |             |      |
|-------------|-------|-------------|------|
| 事例区分<br>(大) | 地域活性化 | 事例区分<br>(小) | 関係人口 |
|-------------|-------|-------------|------|

|      |          |
|------|----------|
| 事例種類 | 中心市街地活性化 |
|------|----------|

### 事例内容・タイトル

文化観光交流施設「八戸ポータルミュージアムはっち」をコアとした中心市街地活性化

### 出典

地方自治研究機構 先進事例調査研究（令和6年度）

## 文化観光交流施設「八戸ポータルミュージアムはっち」をコアとした 中心市街地活性化

### 取組のあらまし

取組団体 青森県八戸市

取組内容 文化観光交流施設「八戸ポータルミュージアムはっち」を市民活動・文化創造の拠点として、中心市街地活性化を図る取組

推進体制 22名（令和6年度）

予算等 289,688千円（うち、一般財源 270,741千円）（令和5年度実績）

### 1 青森県八戸市の概要

人口 21万8,182人 令和6年1月1日現在（住民基本台帳人口）

職員数 1,057人 令和6年4月1日現在（一般行政部門）

総面積 305.56km<sup>2</sup> 令和6年1月1日現在（国土地理院「全国都道府県市区町村別面積調」）

図表 1 青森県八戸市の位置図



出所：八戸市ホームページ

## 2 取組の背景・目的

### （1）文化観光交流施設「八戸ポータルミュージアムはっち」が誕生した背景

青森県八戸市の中心街は 1600 年代より城下町として発展してきた。昭和までは商業、金融、行政等の機能が集まり、八戸の中心部として栄えてきた。しかし、産業構造の変化や大都市への人口流出等による影響からそうした賑わいに陰りが見えはじめ、八戸の顔として魅力や活力をどのように再創造していくかが問題視されてきた。このような状況の中で、中心市街地と八戸全体の活性化を図るために平成 23 年 2 月に誕生したのが文化観光交流施設「八戸ポータルミュージアムはっち」（以下「はっち」という。）である。

図表 2 「はっち」の外観と施設概要

| 施設概要 |                          |
|------|--------------------------|
| 名称   | 八戸ポータルミュージアム<br>(愛称：はっち) |
| 所在地  | 青森県八戸市三日町11-1            |
| 敷地面積 | 約3,387㎡                  |
| 建築面積 | 約1,635㎡                  |
| 主体構造 | 鉄筋コンクリート造（免震構造）          |
| 階数   | 地上5階                     |
| 最高高さ | 約24メートル                  |



出所：「はっち」ホームページより当機構作成

「はっち」は、平成 23 年 2 月に開館して以来、「新たな交流と創造の拠点として、賑わいの創出や、観光と地域文化の振興を図ることで、中心市街地と八戸全体の活性化を目指す」という目的のもと、伝統工芸品の展示場・体験ブースを通じた文化芸術振興の役割や、地域住民・観光客が利用できる場の提供を通じた賑わいを創出する役割、さらには観光展示やラジオによる情報発信を通じた観光資源へとつなぐ玄関口(入口＝ポータル)としての役割等、文化観光交流施設としての多様な役割を担っている。

館内の上りと下りのエスカレーターをほぼ対角の位置に設置し、館内の回遊性を高めることや、館内のあらゆる箇所に「8」にちなんだ様々な仕掛けを取り入れること等の来館者を飽きさせない工夫がなされており、年間平均 80 万人が来館する等、賑わいを見せている。

### 3 取組内容

「はっち」では、コンセプト「地域の資源を大事に想いながら、まちの新しい魅力を生み出すところ」のもとで、(1) 会所場<sup>1</sup>づくり、(2) 貸館事業、(3) 自主事業の3つの事業を実施している。

#### (1) 会所場づくり

会所場づくり事業では、市民や観光客等が、気軽に立ち寄り、街の憩いや集い、そして地域の文化に触れることができる場所を提供している。

代表的なものとして、ア パブリックスペース、イ ものづくりスタジオ、ウ 観光展示、を取り上げる。

##### ア パブリックスペース

1階の「はっちひろば」をはじめとする各階におけるパブリックスペースでは、誰でも自由に、リビングのようにくつろげる場所を提供している。地域住民の憩いの場（高齢者の井戸端会議、学生の勉強スペース）として機能している。また、4階には、地元木材で作られたおもちゃや絵本を揃えている親子向けのスペース「こどもはっち」がある。多くの親子が訪れており、交流の場として機能している。

##### イ ものづくりスタジオ

2階から4階の各フロアには、食やクラフト等のものづくりクリエイターを支援するものづくりスタジオがある。3年を上限として、月額15,000～25,000円程度で貸し出すことで、市民作家<sup>2</sup>の駆け出し活動を支援している。運営側の狙いは、お試し営業の場として活用してもらったのち、入居者が中心市街地に出店することで中心市街地活性化へ繋げることにある。

##### ウ 観光展示

市民作家<sup>2</sup>の作品や八戸市の文化（伝統の祭り、市民に根付く朝市と食、縁ある偉人）、産業（水産業や工業）等の魅力を展示している。各フロアにはコンセプトが設定されており、1階「はじめて訪れたお客さまにも、八戸のハイライトがわかる展示」、2階「八戸の自然がもたらす恵み、街や祭りの賑わいを紹介」、3階「和の粋を感じる空間で、八戸の人と産業・街の発展を見つめる」、4階「子どもと大人の交流空間」、である。

市民作家の作品の代表的なものとして、「からくり獅子舞時計」がある。毎時0分に動くからくり時計で、歯打ちによる大きな音が館内に響き渡る。

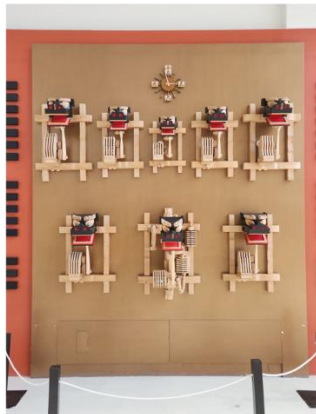
<sup>1</sup> 会所場：「誰でも気軽に立ち寄れる場」、「ひとが集いコミュニケーションが生まれる場」、「地域の文化に触れられる場」を意味している。

<sup>2</sup> 市民作家：市内でクラフト・工芸等の創作活動に携わる市民

文化や産業の魅力の展示については、八戸三社大祭のミニ山車、漁船（木製）の模型、朝市風景のミニチュアなどが挙げられる。

図表 2 会所場づくりの一例

館内展示の一例



からくり獅子舞時計



八戸三社大祭のミニ山車

ものづくりスタジオの一例



出所：当機構撮影（令和6年12月17日）

## （2）貸館事業

市民、市民団体、事業者等の多様な市民活動をサポートするために、「はっちひろば」や、各階のシアター、ギャラリー、スタジオなどを貸し出している。全フロアで合計17の貸しスペースを整備し、年間約2,500件～3,000件の利用実績がある。

「はっちひろば」では、コンサートや講演会、ワインフェス、各種物販イベント等、多目的に利用可能である。外の大通りに向けた全面ガラス張りの内装が特徴的で、施設外を歩く歩行者に、活気あるイベントや創造的な市民活動を周知できる場となっている。

また、和のスタジオでは、着付けや書道教室、日本舞踊や茶道などが行われ、食のスタジオでは、料理教室等が頻繁に開催されている。オープンな空間デザインが、近くを通りがかった人の興味を惹くきっかけとなっている。

## （3）自主事業

自主事業は、「1. 中心市街地の賑わい創出」、「2. 文化芸術活動の振興」、「3. ものづくりを通した新しい価値創造」、「4. 八戸の魅力発信、観光を通した地域活性化」の4つの基本方針に沿って実施している。

具体的な活動例として、文化芸術活動の振興の一環として実施しているAIR事業が挙げられる。AIR事業のAIRは、「アーティスト イン レジデンス」の略称である。建物内に有するレジデンス（宿泊施設を備えた創作スペース）を活用し、アーティストに一定期間滞在してもらい、地域資源を新たな視点で捉えなおし、アートの力により新たな価値を加えることで、地域住民にその魅力を再認識する機会を提供している。



図表 3 「はっち」のレジデンス施設



出所：「はっち」ホームページより当機構作成

## 4 成果・課題

### （1）取組の成果

「はっち」をコアとした中心市街地活性化の取組による成果として、ア 新しい市民活動・文化創造の拠点の誕生、イ 中心街再生のきっかけと可能性の創出、ウ シティプロモーションへの貢献が挙げられる。

#### ア 新しい市民活動・文化創造の拠点の誕生

「はっち」は、市民等が気軽に集まり交流する場やイベントスペース、文化芸術の発表・展示する場等、多様な市民活動の場の拠点として機能してきた。また、市民参加型のアートプロジェクトに代表されるように、市民に対してアーティストの創造的なアイデアや実践に触れる機会を提供し、文化創造の拠点として機能してきた。

#### イ 中心街再生のきっかけと可能性

八戸市では大型商業施設の撤退が相次ぐなど、地域経済の停滞が続いていたが、「はっち」の開館が民間投資による都市機能整備の誘引となる等、中心市街地再生に向けた起爆剤となった。「はっち」を先駆けとして、八戸ブックセンター、八戸まちなか広場マチニワ、美術館等の公共文化施設が集積する（図表5）など、中心街の魅力向上による中心街再生の可能性が示唆される。

図表 4 公共文化施設の位置図と「マチニワ」の内観  
公共文化施設の配置図 八戸まちなか広場「マチニワ」



平成30年にオープン。ガラスの屋根つき広場。  
市民に待合場所やイベントスペースの場を提供している。

出所：「はっち」ホームページ

## ウ シティプロモーションへの貢献

「はっち」の独創的な活動と発信力は多方面から高い評価を得ている。その結果として、「はっち」及び周辺中心市街地のみならず、八戸市全体の知名度やイメージアップに大きく貢献した。「はっち」は、まちづくり等の活動に対する数々の賞を受賞している（図表6）。

図表 6 「はっち」におけるまちづくり活動の受賞歴

| 受賞歴     | 賞名                    | 受賞対象                    |
|---------|-----------------------|-------------------------|
| 平成 24 年 | グッドデザイン賞              | 八戸レビュー                  |
| 平成 25 年 | グッドデザイン賞              | 市民が地域づくりに参画できる仕組みプロジェクト |
| 平成 25 年 | 文化庁長官表彰               | 八戸市                     |
| 平成 28 年 | 地域創造大賞                | 八戸ポータルミュージアム            |
| 平成 30 年 | 東北映像フェスティバル・映像コンテスト大賞 | 88 異国プロジェクト             |
| 平成 31 年 | 地域再生大賞北海道・東北ブロック賞     | まちぐみ                    |

出所：「はっち」ホームページ

## (2) 今後の課題

「はっち」は八戸市の玄関口として八戸市内の魅力を文化・芸術・産業等の広い観点から発信しているため、事業範囲が多岐に渡ることや、収支状況から民間事業者にとって利益を生むことが難しいことなど、指定管理者制度等の官民連携による事業運営は、さまざまな要因から難しさがある。

一方で、開館から 14 年が経過し、設備の修繕や更新が必要になる等のさまざまな要因から運営コストも上昇し、財務状況を圧迫している事実もある。

今後の課題としては、新たな交流と創造の拠点としての公益性と、民間ノウハウを活用した経営合理性を両立した運営体制を構築できるような官民連携のあり方の模索が挙げられる。

## 関連・参考資料

---

八戸市「第5次八戸市総合計画」

[https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/seisakusuishinka/chihososei\\_keikakusuisin/l\\_1/5thmasterplan/5074.html](https://www.city.hachinohe.aomori.jp/soshikikarasagasu/seisakusuishinka/chihososei_keikakusuisin/l_1/5thmasterplan/5074.html)

「はっち」 ホームページ

[https://hacchi.jp/about\\_hacchi/](https://hacchi.jp/about_hacchi/)